中津川市中山道歴史資料館

中津川市の中津川中山道歴史資料館収蔵の中津川宿旧家から発見された古文書には、和宮降嫁の行列や天狗党の往来のようすを示す古文書、幕末の混乱期の重要な出来事の一つである「蘿長同盟」の密談を伝える文書など幕末を駆け抜けた人々に関する貴重な資料が大変多く存在します。



資料館営業時間

午前9時30分から午後5時（入館は午後４時30分まで）
休業日：月曜日（月曜日が祝日の場合は翌日）
年末年始

入場料
小中学生：無料

チケット	大人	330 円
	団体	270 円
年間パス	1650 円	

Tel 0573-66-6888
https://www.city.nakatsugawa.lg.jp/museum/n/index.html

中山道広重美術館



中山道広重美術館は、歌川広重の浮世絵版画を中心とする美術作品の展示・収集・保管を主な目的に開館しました。また、浮世絵や歌川広重に関する講演会など、地域の芸術や文化を振るうためのさまざまな教育活動にも取り組んでいます。美術館では、浮世絵版画など約1400点を収蔵しており、歌川広重「木曽海道六拾九次之内」「東海道五拾三次之内」（保永堂版）など、主に歌川広重の浮世絵を中心に展示している。ほぼ毎月開催の企画展、年に数回の特別展のほか、講座やイベントも開催しています。また館内は浮世絵について楽しく学べ、浮世絵の「重ね摺り体験コーナー」が人気の浮世絵ナビルームや情報ギャラリーなどもあります。

美術館営業時間

午前9時30分から午後5時（最終入場は午後4時30分）
休業日：月曜日（祝日を除く）、
祝日の翌日、年末年始

入場料
18歳以下：無料

個人	企画展	520 円
一般	特別企画展	820 円
団体(20名以上)	企画展	420 円
一般	特別企画展	660 円

Tel 0573-20-0522
https://hiroshige-ena.jp

馬籠宿本陣／藤村記念館

旧中山道の馬籠宿は、明治28年と大正４年の２度の大火で石畳道と枡形道以外は全て焼失しました。後の本陣跡は、日本の近代文学を代表する偉大な小説家である島崎藤村（1872-1943）の生家でもあります。また、藤村記念館では、藤村の作品や書斎が展示され、その数約5000点にも及びます。馬籠を舞台とした藤村の長編小説「夜明け前」には、藤村の父がこの本陣で、幕末から明治初期の動乱期（1850～1880年）までの苦悩の日々が描かれています。



開館時間

9:00～17:00（4月～11月）／ 9:00～16:00（12月～3月）
（入館は15分前まで）

休館日

12月～2月の毎週水曜日

入場料

大人	500 円
小人	100 円

Tel 0573-69-2047
http://toson.jp

中山道 ひし屋資料館



大井宿の有力な商家であった「ひし屋」古山家は、江戸時代中期（1603-1868）以降、大井村の庄屋を務めた家柄で、明治（1868-1912）以降は、郵便取扱役、恵那郡役所出張屋（銀行）に任命され、養蚕研究や俳諧文化の推進にも力を尽くしました。その住居は明治初年に改築されていますが、大規模で質の良い近世的町屋建築の特色をよく示しており、恵那市の文化財に指定されています。
資料館は、この古山家を改修・復元して当時の町屋を体感できるようにした施設で、店蔵を改修した展示室では、中山道、大井宿、ひし屋の3つのコーナーがあり、絵図や古文書、調度品などが展示されています。

資料館の営業時間

午前9時から午後5時（最終入場は午後4時30分）
貸室（茶室）午前９時から午後９時
休業日：月曜日（祝日を除く）、祝日の翌日、年末年始

入場料
18歳以下：無料

個人	200 円
団体（20名以上）	150 円

貸室(茶室) 1時間　1,020円
障がい者及び付き添い者　１名無料

Tel 0573-26-2111
http://www.city.ena.lg.jp

周辺観光情報

岐阜県



中津川・恵那地域は岐阜県の南東部に位置しています。日本のほぼ中央に位置する岐阜県は、北は飛騨地方、南は美濃地方の2つの地域に分かれています。飛騨地方は、標高3,000mを超える雄大な美しい山々が特徴です。
美濃地方の特徴は、広大な平野部と清らかな川の流れです。このような地域間のコントラストが、岐阜には他の地域にはない多彩な景観や文化を育んでいます。
岐阜県には、高山をはじめとする県内の「小京都」と呼ばれる古い町並みや歴史地区から、織田信長が住んでいた岐阜城まで、「日本的」な場所や風習がたくさんあります。信長が日本を一つの国に統一するための拠点としたのが岐阜です。また、世界遺産の白川郷や伝統的な鵜飼・釣りなど、岐阜には「和」の要素がたくさんあります。温泉も豊富で、奥飛騨温泉郷地域には日本一の露天風呂があり、下呂温泉は日本でも有数の温泉地です。岐阜に来たら、自然の風景を眺めながら、心も体も癒される温泉に浸かってみてはいかがでしょうか。

下呂温泉

下呂市は、中津川・恵那地域の北側に位置し、下呂温泉は日本三大名湯の一つとして有名です。泉質は無色透明でほんのりとした湯の香りがあり、実になめらかな肌ざわりの温泉です。 入浴すると身体が大変温まるので血行が良くなり、疲労回復や健康増進に効果があるため「健康の湯」といわれています。 また、泉質がアルカリ性単純泉のため肌にとてもやさしくツルツルした肌ざわりになるので、「美人の湯」とも呼ばれています。温泉街の散策に疲れたら、足湯で一休みすることも下呂温泉の人気の一つです。

木曽渓谷

中津川・恵那地域は木曽谷の玄関口です。木曽は長野県南西部に位置しています。
旧中山道の面影が現在も残る歴史の里。木曽山脈に挟まれる細長い谷底平野に木曽川が流れる木曽谷には、江戸と京都を結んだ中山道の宿場町で栄えたほか、木曽は名産の木曽檜で発展した地域でもある。また木曽川の急流が生み出した、奇岩が続く寝覚の床や、森林浴発祥の地である赤沢自然休養林などの自然の景色も楽しめます。

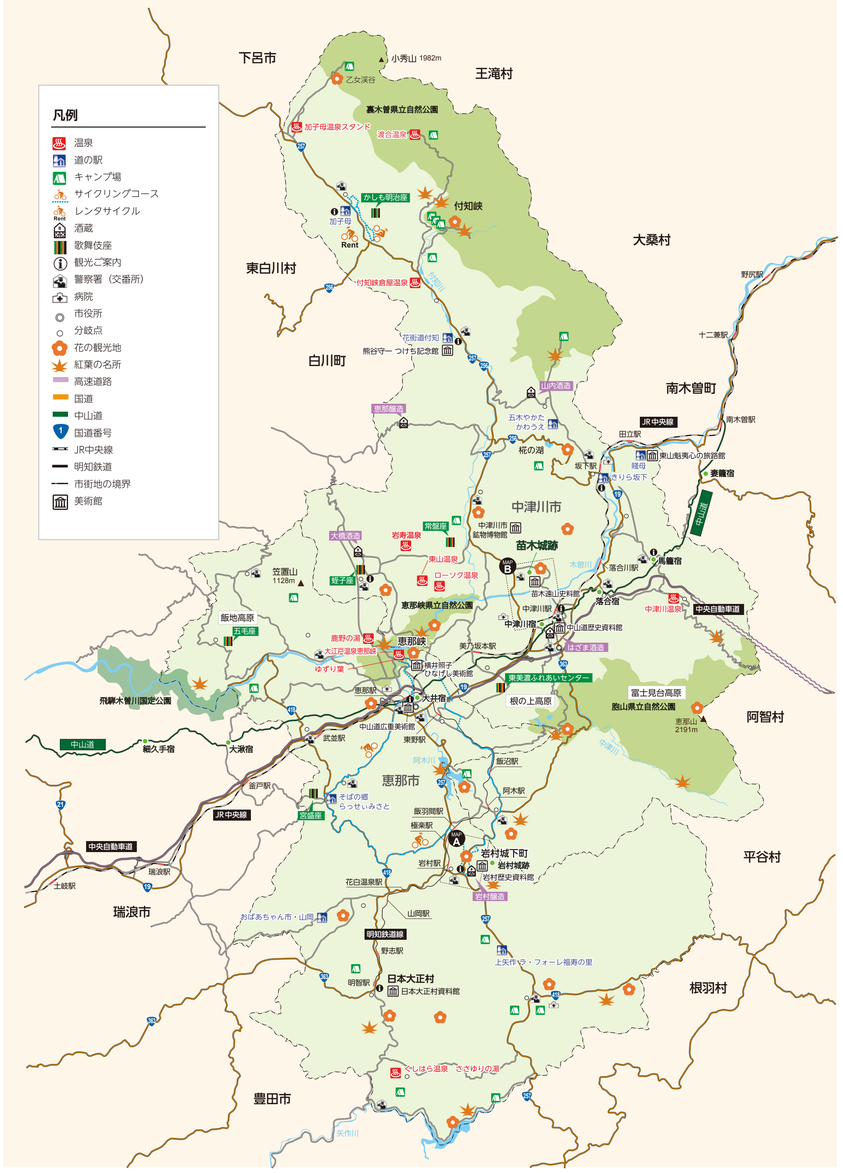
多治見市／土岐市／瑞浪市

近隣の多治見市・土岐市・瑞浪市は、陶磁器で栄えた地域で、美濃焼は全国的でも有名な焼き物の一つです。
長い歴史と伝統を持つ美濃焼は、食器類の生産量が全国シェアの約50%以上を占めています。この3つの街を散策すると地域には多くの陶器工房、陶磁器博物館、専門ショップがあり、多くの飲食店でも地域の陶磁器が使われています。



豊田市

豊田市は、中津川恵那地方の南に位置しています。
豊かな自然に囲まれた産業と歴史のある街です。
世界最大級の自動車会社の名を冠し、日本の産業の中心地である豊田市ですが、一年を通して素晴らしい景色と絶景に恵まれています。



壮大な山城跡めぐり

苗木城跡



中津川市にある苗木城跡は、山頂の巨岩を利用して積まれた石垣が特徴的で、敷地の確保が困難なため、建物の構築方法に懸造りが使われており、自然の地形を有効に生かして築かれた珍しい山城です。
また、木曽川北岸の小高い山に築城された戦国及び近世の城郭跡です。川面から天守までの標高差は約170mあります。天守展望台からは中津川市街が一望でき、すぐ下には木曽川、正面には恵那山の美しい風景が広がっています。
築城した遠山家の守り神は八大龍王と言われ、八大龍王と言うのは仏教守護の八体の龍王（龍神）を言います。明治以降、現在の場所に据えられたという事ですが、苗木城の城郭内には八大龍王の祠が現在も残っています。また近くには苗木遠山史料館があり魅力ある文化や歴史を紹介していますので、是非お立ち寄りください。

岩村城跡

岩村城は、大和の高取城(奈良県)備中の松山城(岡山県)と並ぶ日本三大山城の一つに数えられる名城。城は江戸諸藩の府城の中でも最も高い所(標高717m)に築かれ、高低差180mの天嶺の地形を巧みに利用した要害堅固な山城で、霧の湧き易い気象までも城造りに活かされており、別名「霧ケ城」とも呼ばれています。1185年(文治元年)源頼朝の重臣「加藤景廉(かとうかげかど）」がこの地の地頭に補せられ創築されてから、鎌倉・室町の300年間、戦国の100年間、更に江戸期の300年間に亙り城と城主が連綿と続き、明治に至り廃城令で廃城されるまで、連綿と存続しました。700年間に及ぶ城の歴史は、日本の城史にも例を見ないものなのです。
信長の叔母は「女城主」と呼ばれ、城主として武田勢から到底最後まで城を守ることができないと悟り、秋山信友の提案を承諾。家臣や領民を守ることの引き換えに政略結婚の道を選んだと伝えられる。
また岩村城の本丸虎口の大規模な石垣は「六段壁」と呼ばれ、当初は一段の高石垣でしたが、崩落防止のために補強を繰り返した結果、六段にもおよぶ石垣となっている。歴史博物館では、それらの技術に関する資料を復元しています。城下町は２つのエリアに分かれています。岩村川の北側に武家屋敷、南側に商家屋敷があります。城下町のあちこちには、昔ながらのナマコ模様の壁や格子などが見られます。



中山道

Nakasendo Map

中山道は江戸時代の五街道のひとつで、江戸日本橋から京都三条大橋までの全長534キロの道のりで、この地は木曽を通るので「木曽路」とも呼ばれています。江戸時代の参勤交代で大人や行き交い、当時の宿場は多くの旅人の疲れを癒す休息場所として利用され発展を遂げていた。
中山道には69の宿場町がありましたが、中津川・恵那の地域には43番目から馬籠宿、落合宿、中津川宿、大井宿の4宿の宿場町がありました。
今もなお町のあちらこちらには、当時を偲ぶ建造物や景観が多く残っている。また現在では、中山道を歩くトレッキングも観光の一つとして人気を博している。

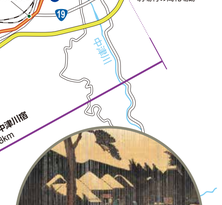




中津川宿（晴）



大井宿

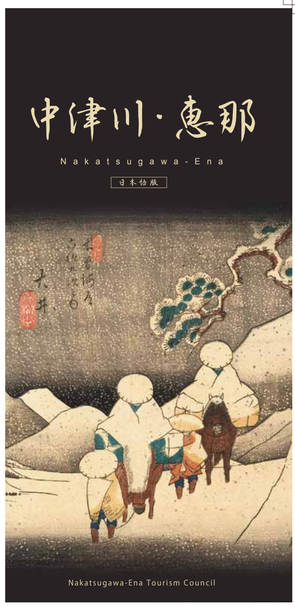


馬籠宿



中津川宿（雨）

浮世絵の写真：歌川広重、渓斎栄泉
"木曽海道六拾九次"（1835-1838）







手荷物一時預かりサービス

中山道の中津川宿と馬籠宿周辺を歩かれる方や、市内観光後各引取り場所で同日の16時30分までに引取りができる方を対象とした手荷物配送サービスです。

料金:￥300（税込）／手荷物1個当たり

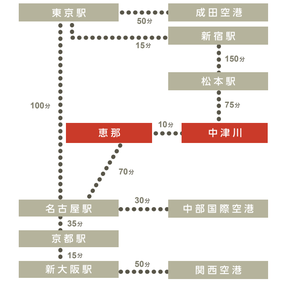
妻籠観光案内所
TEL.0264-57-3123

馬籠観光案内所
TEL.0573-69-2336

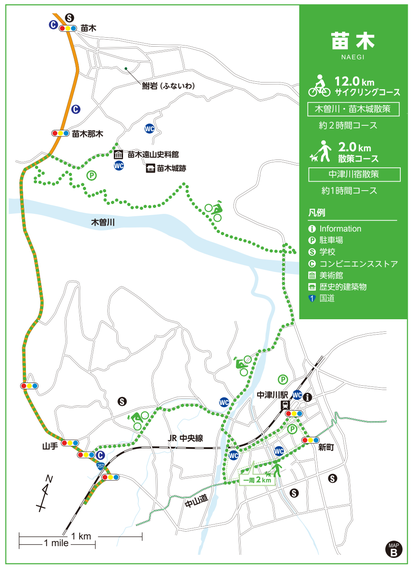
アクセス



東京から電車で 2.5 時間









地の力、人の力。

日本の原風景が引き継がれる里山

中津川・恵那地域は、恵那山麓に広がる断層が生み出した地形の上に栄えた里山です。

火山や地震活動によって生まれた山々に囲まれた大地は、複雑な地形や微細気候を生み、自然美と人々の生活に欠かせない恩恵をもたらしました。

京と江戸を結ぶ中間点に位置するこの地は、古くは東山道、その後に中山道が通過し、険しい山々を通る木曽路の玄関口として、歴史の舞台の中の一つとなり、様々な旅人の接点の中で文化が育まれていきました。

域内各地に広がる農村は、自然的特性に応じた景観や農業が形成され、その土地と人々、そして世代間をつなぎ、コミュニティの絆を深めるための固有の祭事や風習が受け継がれるようになりました。

この土地を訪れた時、まず感じるのは大地の真性さと恩恵と言えます。それはこの地に住む人々の生活、感性、思想に大きな影響をもたらしているものでもあります。

豊かで多様な自然、生態系、それらにより培われた人々の生活文化に触れることができることも、この土地の魅力と言えます。

硬い地盤の上に力強く根を張り、根上がりしたヒノキは、この土地を象徴する存在でもあります。豊かで厳しい自然、そこに畏敬を抱き、力強く生きてきた人々の生活が今も息づく日本の里山を体現するものと言えます。

1

地質と地形

周囲を山に囲まれ、起伏に富み、岩石がむき出しの箇所などが顕著で、複雑な地質と地形を持つ中津川・恵那地域は、その地質的特性が人々の生活や文化に影響を与え、独自性を形作っており、この地域の魅力を語る上での出発点と言えます。

この地を訪れた時、何よりもこの大地・自然の恩恵があり、そこで人々が生かされ、自然を生かし、調和した暮らしが形作られていることが発見できます。

Chapter 1. 地質

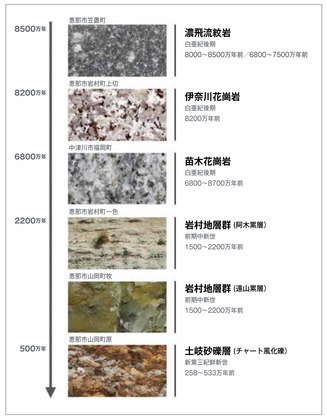
当地域の地質は、中生代白亜紀後期（6,500～8,500万年前）の巨大規模の噴火活動により形成された濃飛流紋岩や花崗岩類がその基礎となっています。

濃飛流紋岩は、南は恵那山のあたりから北は富山県の小矢部川上流まで、約3,500㎢にも及ぶ世界最大規模の噴火によりできた岩盤で、その深さは平均1,500～2,000mとされています。

また、濃飛流紋岩が形成された時期と重複し、地下のマグマ活動により形成された苗木花崗岩、伊奈川花崗岩は、城や棚田の石垣、放射能泉（温泉）、濃飛流紋岩とともに石材としても利用られるなど、人類の産業や生活に活用されている鉱物資源です。

南西部は中新世前期（1,500～2,200万年前）に形成されたとされる堆積岩が分布しています。この地層帯は「岩村層群」と呼ばれ、上流から堆積した土砂により瑞が形成されたのちに海と結合した時代もあり、貝類の化石を見ることもできます。

その後、新第三紀鮮新世（258～533万年前）頃には河川により運ばれた上流からの砂や石が堆積し、土岐砂礫層と呼ばれる堆積土壌を形成します。150年頃前には、断層活動の変化により中津川・恵那の市街地北部に位置する堆積土壌帯は隆起し、現在の赤土平と呼ばれる小高い台地が形成されました。この赤土平の土壌では現在、質の高い落花生、里芋、栗、茶などが生産できる農地として重用されています。



■ 地質分類

Chapter 2. 地形と断層の働き

日本は大平洋プレート、ユーラシアプレート、北アメリカプレート、フィリピンプレートが交わる場所であり、古来より地震大国として知られています。またその地震活動により多数の活断層が形成されており、中津川市神坂から北北西に80kmほど伸びる巨大な断層、阿寺断層もその一つと言えますが、その中でも当地東部の坂下地区は断層の形跡が明確で、日本でも最初に研究対象となった断層のうちの一つです。阿寺断層の働きは、小秀山をはじめとした阿寺山地の山々を高く押し上げました。

そのほか、中津川・恵那地域は、大小様々な断層に囲まれおり、南部は屏風山断層、恵那山断層のほか小規模な断層が幾重にも存在し、恵那山や根の上高原、岩村盆地などを形成しているほか、恵那市北西部を通る赤河断層は美濃高原を作りました。

このような断層の活動が周囲に山地を形成することで、恵那盆地の地形が生み出され、夏季の山間部への局所的豪雨や、雪が少なく寒冷な冬季の気候などの微細気候を生み出し、山間部の木材の生育や南部の寒天生産など地域の産業に影響を与えることになったほか、周囲の山地が一つの閉じた空間を形成し、文化の孵化に影響をもたらしていることも推察されます。

Chapter 3. 地質と地形が生む自然の景観美

濃飛流紋岩や苗木花崗岩など、中生代白亜紀後期に形成された花崗岩、溶結凝灰岩、花崗閃緑岩により形づくられた岩盤と水流により姿を現した渓谷は、当地を象徴する自然の景観美の一つです。

断層により形成された周囲の山々からは、地質を構成する岩盤により濾過された豊かで美しい軟水が湧き出し、魚類の生態系をはじめ、この土地に豊かさと美しさをもたらしました。



■ 恵那峡

地質と地形

恵那峡は、濃飛流紋岩や苗木花崗岩により形成された岩盤を木曽川の激しい流れが彫刻し、形づくられた深谷です。

その特徴の一つが、マグマの状態だった巨大な岩石が地中で冷却され、固化する際の堆積の収縮により発生する「方状節理」と呼ばれる作用により生じた岩石の裂け目が、木曽川の浸食により露わになったことで生まれる絶景でしょう。この露わになった岸壁は、屏風の絵面のような景観から「屏風岩」とも言われています。

恵那峡という名称は、観光が産業としての発展をみせていた1920年に、当時の著名な地理学者、志賀重昂を招き、命名を依頼したことに由来し、同年には日本最初の総合雑誌と言われる「太陽」で恵那峡が紹介されるなど、積極的なアピールが展開されていた様子がうかがえます。

この恵那峡は、1921年～1924年にかけて行われた大井ダムの建設により景観は大きく姿を変え、現在の姿になりました。



■ 付知峡

付知峡

付知峡は阿寺断層により隆起した阿寺山地の小秀山（1982m）を源流とする付知川の急流により、濃飛流紋岩の硬い岩盤が削られることで形成されてきた渓谷です。

阿寺山地の山々が雨雪を せき止めることで得られる豊富な雨量と、神宿横林として保護された、人々の立ち入りが制限されている日照時間保護区域の山林を水源に持つ付知川は、その豊富でエメラルド色に輝く水の色から「青川」とも呼ばれ、高様の滝や不動滝など幾重もの滝を流れ落ち、木曽川へと流れ着きます。

かつては質の高い裏木曽の木材を下流へと運ぶ水運にもなっていたこの清流は、現在、流域にキャンプ場も設けられ、付知峡の景観とともに身近に自然とふれあえる場所となっています。



■ 根の上高原

根の上高原

恵那山の西に位置する根の上高原は、屏風山断層と川上断層（恵那山断層の一部）の影響によって形成され、保古山（969m）を最高地点に、標高900mほどの位置になだらかな起伏を持つ高原です。

主に砂礫と粘土層の混じった土岐砂礫層により構成される地盤は、水の浸透を妨げる粘土質の土が含まれており、湿地帯を形成します。

ここで形成される酸性土壌の湿地帯は、湿原帯の植物の繁殖を抑制し、氷河期に栄えた亜高山帯植物を残存させる環境を保つことができたことから、コバイケイソウ、ミカワバイケイソウといった白亜紀後期の在来植物を見ることができます。

根の上高原一帯は、濃飛用の湖である保古の湖、根の上湖を中心に飽山県立自然公園に指定されており、キャンプ、ワカサギ釣り、紅葉などが楽しめます。

Chapter 4. 水質と恵那山麓の温泉群



■ 高峰の滝

■ 木曽ヒノキ個林

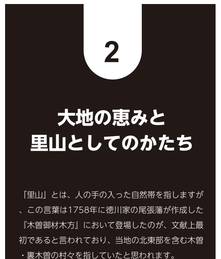
断層により形成された東部の阿寺山地、南部の恵那山、西部の美濃高原は、雨雲の滞留を促し、夏季に十分な降雨をもたらします。その雨は、濃飛流紋岩や花崗岩類の層により濾過され、断層の破砕帯などから湧出します。

花崗岩、溶結凝灰岩、花崗閃緑岩により濾過された水は、堆積土により濾過された水と比較し、カリウムやナトリウムが相対的には多く、カルシウムやマグネシウム、硫酸イオンなどが極めて少ない、低ミネラルの軟水が生成されるとされています。

この軟水の水は、定評のある質の高い米や、清酒の特色へと反映されるなど、食文化にも大きな影響をもたらします。

また、中津川・恵那地域は、苗木花崗岩の中に含まれるジルコンやモナズ石などに含まれる微量の放射性物質の影響で、それらが変化して生成される微量のラジウム、ラドン、トロンなどが溶解されている放射能泉が広く分布しており、湯治用の温泉としても人気を集めています。

また、恵那峡の一部には地中に埋没した東海湖の化石海水の影響とみられる塩化物泉もあるほか、南東部の中津川温泉は美肌効果のある炭酸水素塩泉が、北部の山間部にある渡合温泉には二酸化炭素泉があるなど、多様な泉質があることもこの地域の魅力と言えます。



2

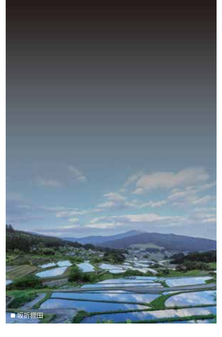
大地の恵みと里山としてのかたち

「里山」とは、人の手の入った自然帯を指しますが、この言葉は1758年に徳川家の尾張藩が作成した「木曽御材木方」において登場したのが、文献上最初であると言われており、当地の北東部を含む木曽・裏木曽の村々を指していたと思われます。

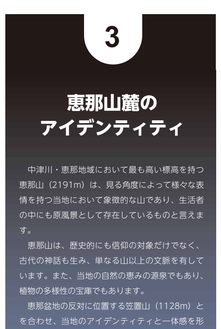
里山という概念は、様々な研究者によりその定義について提起されていますが、2001年に環境省は「都市域と原生的自然との中間に位置し、様々な人間の働きかけを通じて環境が形成されてきた地域であり、集落をとりまく二次林と、それらを混在する農地、ため池、草原等で構成される地域概念」と定義しています。

それらを踏まえ、小寺正一(2000)はその分類を「形状」「植生」「立地」に分けて整理した上で、里山の伝統的な機能として「資源供給機能」「生物多様性保護機能」「水源涵養・防災機能」「環境保全機能」を有すると述べています。

地理的環境がもたらす気候、地質・地形がもたらす自然の恩恵をもとに、それを取り、活用し、生活環境や文化として培い、継承してきた中津川・恵那地域の農村コミュニティは「里山」として成り立ち、息づいています。



■ 梅谷棚田



■ 恵那山

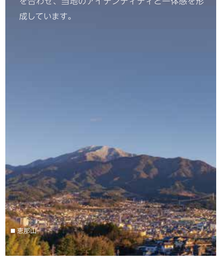
3

恵那山麓のアイデンティティ

中津川・恵那地域において最も高い標高を持つ恵那山（2191m）は、見る角度によって様々な表情を持つ当地において象徴的な山であり、生活者の中にも原風景として存在しているものと言えます。

恵那山は、歴史的にも信仰の対象だけでなく、古代の神話も生み、単なる山以上の文脈を有しています。また、当地の自然の恵みの源泉でもあり、植物の多様性の宝庫でもあります。

恵那盆地の反対に位置する笠置山（1128m）とを合わせ、当地のアイデンティティと一体感を形成しています。



■ 恵那山

Chapter 1. 恵奈郡としての歴史

恵那（かつては「恵奈」と記載された）という名称は、飛鳥池遺跡から出土した木簡(677)により初めて見ることができ、「美濃国司解」(750)において、一つの行政区域としての恵奈郡（えなごおり）として位置付けられていたことがわかっています。

その語源は、蝦夷（地のはずれの意）や田舎という意味が含まれており、奈良を中心とする大和朝廷の人々にとって東方への遠征や開拓をする上での東山道の途上の町であり、ここから深い山中へと進んで行く東の端の土地であったことが推察されます。

恵奈郡は、現在の中津川・恵那地域一帯に加え、同地の人々が木曽路を開拓たことから、木曽谷の地域一帯も含まれ、美濃の国の東端の行政区域を形成していました。

なお、東山道にも中山道と同様に宿駅が存在し、当地では大井駅と坂本駅（現在の中津川市駒場）があり、その行政的中心は大井駅の一帯であったとされています。

Chapter 2. 恵那神社

歴史的に日本は、地域の共同体と氏神が密接に関連した社会単位としての農村集落が各所に存在していましたが、特に7世紀以降に始まる律令政治の時代において、社会を統治するための手法として、神社を階層化して権威付けをし、統治する手段が採られてきました。

当時の法律規定文書であった「延喜式」(905)においては、宮中の管轄下にある神社を「式内社」として位置付け、各地の氏神を束ねる神社としての役割が与えられています。

当時における式内社であり、日本の神話に登場し皇室の祖神ともされる天照大神の脇衣（へその緒）を納めた恵那山を祀る神社としての伝説を持つ、歴史的・象徴的な神社であると言えます。



■ 恵那神社



■ 梅谷棚田



■ 落合棚田



■ 蛭久保棚田

4

歴史の足跡

街道・城跡・山岳道

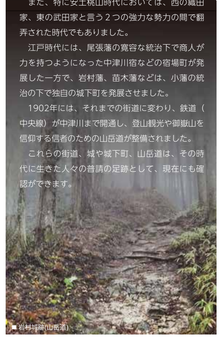
日本列島の中心部、険しい山々が連なる木曽谷の玄関口に位置する中津川・恵那地域は、東山道の通る古代から、街道の存在が、街や文化、人々の暮らしに大きな影響をもたらしてきました。

また、特に安土桃山時代においては、西の織田家、東の武田家と言う２つの強力な勢力の間で翻弄された時代でもありました。

江戸時代には、尾張藩の寵容な統治下で商人が力を持つようになった中津川宿などの宿場町が発展した一方で、岩村藩、苗木藩などは、小藩の統治の下で独自の城下町を発展させました。

1902年には、それまでの街道に変わり、鉄道（中央線）が中津川まで開通し、登山観光や御嶽山を信仰する信者のための山岳道が整備されました。

これらの街道、城や城下町、山岳道は、その時代に生きた人々の普請の足跡として、現在にも確認ができます。



■ 岩村城跡（城石）

Chapter 1. 街道

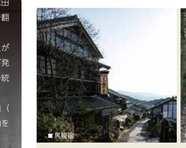
街道、及び水運の要である木曽川は、当地の流通を支える重要な要素であり、それに付随して商業や文化も発展を見せました。また、鉄道や自動車のない時代においては、人力や馬がその荷役を担い、中継点となる宿駅や町の機能も現代のそれとは大きく違うものでした。

また、中馬街道や石巣峠など、山中を通る道が今日より存在感を持っていたことも窺えます。

東山道と神坂峠遺跡

古代の道として知られる「東山道」の道が整備された時期は正確には分かっておらず、「続日本記」で見られる「岐蘇山道」（きそのやまみち：702年開通）、「古事記」（きそのみち：713年開通）が開通する以前には通っており、少なくとも8世紀初頭には駅（宿駅）が整備されていたとされます。

この東山道の難所として知られていたのが「神坂峠」です。1921年以降の発掘調査により、勾玉、管玉、臨玉、白玉などの石製模造品、須恵器、土師器、緑釉陶器、灰釉陶器などが出土しており、日本で数少ない峠に存在する祭祀機構の遺跡であり、古墳時代から古代・中世にわよ峠神祭記の実態をうかがえる代表的な遺跡として知られています。また、同時に陶磁器の重要な流通経路であったことも推察されます。



■ 馬籠宿



■ 中山道「琵琶峠の石畳」



■ 中津川宿



■ 中山道大井宿

中山道と宿場町

東山道に続き、特に江戸時代に京都と江戸を結ぶ官製街道として整備されたのが中山道です。

この街道は、初期の東山道と違い、木曽谷を通るルートに変更され、勅使の体制維持のために設定された参観交代をはじめとした、大名や皇族といった要人の行列が通る道として利用られました。

それは、例えば1636年4月1日、尾張大名の徳川義直が臼光東照宮の遷宮式典に向かう際に、夕食として大井宿で「あじめどじょう」を食べ喜ばれたとされる記録、1861年10月29日に仁孝天皇の娘和宮が徳川家茂（第14代将軍）に嫁ぐ際に道中、中津川宿で宿泊したとされる記録、また、1862年7月17日には、中津川宿にて長州藩主毛利慶親が杉小五郎、後の首相伊藤博文らが同席し、公武合体から尊皇攘夷へと舵を切ることとなった「中津川会議」が行われるなど、歴史の舞台となっています。

宿場町では、要人をもてなすための本陣、脇本陣といった有力者が務める宿のほか、直線的な侵入を防ぐ「枡形」、お触れ書きを掲げる「高札場」、輸送のための人馬の調達や整備を行う「問屋場」などが機能しており、庶民の泊まる旅籠、木賃宿（共有台所付きの簡易宿泊場）、茶屋などが軒を連ねていました。

中山道は西国の人々が江戸に向かう上で重要な中継点であり、当地は、飛騨から飛騨街道、名古屋からつながる下街道など交通網が集積する要衝であり、商業都市としても発展し、商人がお大名力を持つことにもなりました。

街道及び宿場町は、宿駅ごとに道標を引き継ぐ伝馬によって成立する交通輸送システムが構築されており、鉄道駅が開通されるまでの時代、そのシステムを基盤として当地の市街地が形成されてきたと言えます。

5

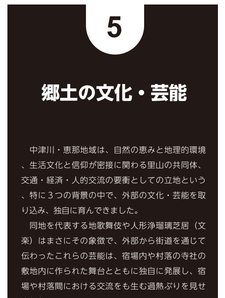
郷土の文化・芸能

中津川・恵那地域は、自然の恵みと地理的環境、生活文化と信仰が密接に関わる里山の共同体、交通・経済・人的交流の要衝としての立地という、特に３つの背景の中で、外部の文化・芸能を取り込み、独自に育んできました。

同地を代表する地歌舞伎や人形浄瑠璃芝居（文楽）はまさにその象徴で、外部から街道を通じて伝わってきたこれらの芸能は、宿場内や村落の寺社の敷地内に作られた舞台とともに独自に発展し、宿場や村落間における交流をも生む遺熱ぶりを見せました。

名古屋などの都市からも距離があり、木曽路の玄関口であり、街道が交わる交通要衝であったことから、恵那山麓の盆地の中に都市圏が形成されていたことが、独自に文化を発展させる孵化装置として働いた結果と言えます。

また、大地が作る美しい自然景観は、住人に美意識をもたらすとともに、外部の人々を引きつけ、文化交流・発展に結びつくきっかけも作られていました。



■ 阿寺神社前

Chapter 1. 東濃地歌舞伎

東濃地歌舞伎とは、中津川・恵那地域を含む、岐阜県の南東部（東濃地方）に位置する地域で継承されている、住民により演じられる芝居（地芝居）です。

現在、日本全国にある地歌舞伎の保存団体は200あるとされ、岐阜県には30団体、愛知県を合わせると47団体あり、全国の４分の１程度が当地の周辺に集中しています。その中でも東濃地方の保存団体の数は17（うち中津川・恵那地域は12）と、全国でも最も密集して存在する地域と言えます。

東濃地歌舞伎は、17世紀に京都にて出雲阿国により始められた「かぶきおどり」に由来します。それは、関ヶ原で敗れた西軍の残党が奇異な格好で派手に振舞っていた「傾奇者」と言われる人々を取り上げて踊りにしたもので、その後に形を変えながら興行として全国に広がりました。

東濃地方においてもその流れを受け、1683年に宿村（瑞浪市宿町）の岩屋観音御開帳の際、名古屋より相模太夫という歌舞伎一座が来るなど、村の賑い芝居（謝礼を払い外部から劇団を呼び寄せて行う芝居）から始まり、その後に住人が自分たちで芝居を行う「地芝居」の文化が確立していきます。

東濃地歌舞伎の地芝居の記録としては、1706年の上呂（下呂市）の久津八幡宮祭礼のものが最も古く、その後、1731年に東野で、1809年に苗木藩下の村祭りでの地芝居が記録されています。

同地において地芝居が継承・発展していく過程においては、村落の寺社の境内の中に「農村舞台」と言われる地歌舞伎小屋が数多く作られ、いわゆる祭礼などの「ハレ」の日に合わせて氏神に奉納されるという形が一般化していたようです。

また、中山道の宿場においても地歌舞伎が盛んに行われており、宿場内のみならず、近隣の住民、旅人、木曽福島の尾張藩の代官までもが芝居を楽しんでいました。

地歌舞伎は、芸事に寛容であった尾張徳川家により継承発展を遂げることができましたが、その徳川家ですら「百姓御条目」(1717)において、家業がおろそかにならないような戒めがなされていたようです。また、小藩であった苗木藩や岩村藩でも禁止令が出されていた時代もあったようですが、それでも芝居が行われ、処罰される例もあったと言われるほど、この地で白熱していました。

明治後期に入ると、各地で宿場や村を代表する地歌舞伎小屋の建設が続きます。1887年（明治20年）に神明座（坂下）、1888年に若宮座（坂下）、1889年に萬歳座（坂下）、新盛座（坂下）、1891年に常磐座（福岡）、1894年に明治座（加子母）、1901年建造、1949年改修移築に笹子座（笹川）、1911年に中央座（中津川）などが建造され、さらなる発展の機運がありましたが、第二次世界大戦という厳しい時期や戦後の娯楽の多様化の波の中で中断を余儀なくされる地域も出てきました。

しかし、昭和の後期に差し掛かり、地域の人々の熱意と行動により各所で保存会が立ち上がり、その継承や再興を遂げ、今日に至っています。

その中でも積極的な活動を行っていた東濃地歌舞伎中津川保存会は、2010年の上海万国博覧会において有志で会場に赴き、日本館において地歌舞伎を通じて岐阜県の紹介を行い、それが契機となり文化と観光紹介のための世界各地で海外公演を行っています。



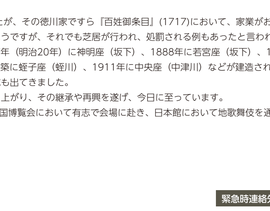
■ 地歌舞伎



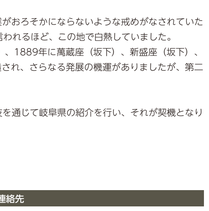
■ 東野座



■ 常盤座



■ 常盤座



■ 笹子座

Chapter 2. 文楽（人形浄瑠璃芝居）



■ 恵那文楽

中津川・恵那地域では、文楽と呼ばれる人形芝居も伝統芸能の一つとして継承されています。文楽は、人形浄瑠璃芝居とも言われ、「傀儡子」と言われる人形と、平曲、小物、物語の語りもの、琵琶、扇子などを用いる「浄瑠璃」、室町時代に伝来した「三味線」を合わせて用いた人形芝居です。

起源は諸説ありますが、一説では、外来の漂白民族によるものを由来とし、江戸時代に限定的に許可された流派が広まり、近松門左衛門が登場して以降の享保年間(1716～1736)に人形技法の高度化が進んだとされます。

江戸時代における当地の人形浄瑠璃芝居については、地歌舞伎と同様、街道を通じて来訪する他地域の芝居集団によって持ち込まれ、人形浄瑠璃の場合、淡路からの人形遣いの巡業興行が来訪し、祭事などで公演される「買い芝居」が始まりと言われます。

記録では、1682年につけち牛頭天王社で、淡路からの人形遣いの興行が行われたとあり、当時の豪農であった天世田口忠左衛門慶寛の働きかけで独自に「三番叟」が始められ、これが当地に残る文楽の一つ「付知町翁舞」の源流とされます。

また、1698年には阿木村の塞の神の祭礼で、1772年には飯妻にて買い芝居が公演された記録が存在します。

地芝居としての東那文楽（川上）の形跡は、口碑では天明年間(1781～1788)に中村伍十という人形遣いの名人が活躍したと伝えられているものの、書物で確認できるのは寛政5年(1774)、飯妻の村庄屋宮地藤四郎の記録を待たねばなりません。また、その2年後に手賀野邑で行われたとの記録もあります。

今日、この地域には付知町翁舞、恵那文楽、大井文楽が継承されています。

Chapter 3. 文学と芸術

中津川・恵那地域には、その自然に惹かれて訪れ、滞在した文学家や芸術家がいる一方、当地を出身として羽ばたいた文学家、芸術家も存在します。

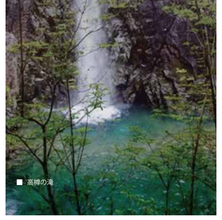
最も古く住み着いたとされる文学家は「徒然草」で知られる吉田兼好でしょう。吉田兼好の主であった後宇多上皇が死去した1324年以降、落合川強清水付近に庵を結んだとされますが、恵那郡の郡主が役人を引き連れ狩りをしている様を近くで見、引き払ったとされており、その跡には、江戸時代に神坂島田家六代目七衛門（島田采女）が建てた供養碑が残っています。

明治初期に馬籠に生まれ、9歳で上京ののち、著名な作家となった島崎藤村(1872-1943)は、第一次世界大戦中にパリで過ごす中、馬籠の名家の出で、平田国学者として幕末・維新後を生きた亡き父を主人公に、馬籠を舞台として激動の時代を描く「夜明け前」の構想を描き、帰国後に執筆。日本が第二次世界大戦へと突き進む言論統制の中にあり、可能な限りで、その時代に生きた宿場の人々の言論や暮らしを小説として描いた同書は、時代を映す貴重な作品ともなっています。

島崎藤村のほか、山本芳翠(1850-1906)、熊谷守一(1880-1977)、前田青邨(1885-1977)など明治から昭和にかけて活躍した画家も多くこの地域から輩出されているほか、旧岩村藩出身の教育者・研究者が幕末から昭和にかけて活躍しました。

Chapter 4. 恵那山麓の温泉群

恵那山麓の温泉群は、恵那山麓の地下に埋没した東海湖の化石海水の影響とみられる塩化物泉や、南東部の中津川温泉は炭酸水素塩泉が、北部の山間部にある渡合温泉には二酸化炭素泉があるなど、多様な泉質があることもこの地域の魅力と言えます。



■ 高峰の滝

■ 木曽ヒノキ個林

緊急時連絡先

警察機関（緊急通報用）	110
消防署（救急車、消防車）	119

鉄道会社

JR東海／テレフォンセンター（名古屋）	050-3772-3910
明知鉄道株式会社	0573-54-4101

バス会社

東鉄バス	0573-26-2137
北恵那交通株式会社	0573-66-1555

タクシー会社

東鉄タクシー	0573-78-2135
近鉄東美タクシー株式会社（中津川）	0573-66-1221
近鉄東美タクシー株式会社（恵那）	0573-26-1331
株式会社サカガワ／タクシー	0573-75-3107
豊タクシー株式会社	0573-26-2165

観光情報

中津川	0573-62-2277
馬籠	0573-69-2336
付知町	0573-82-4737
坂下	0573-75-4444
蛭川	0573-45-2211
加子母	0573-79-3319
恵那	0573-25-4058
岩村	0573-43-3231
明智	0573-26-6862

中津川・恵那広域行政推進協議会
〒509-7203 岐阜県恵那市長島町正家 1067-71　恵那総合庁舎内
TEL: 0573-26-1111（内線 411）

令和８年２月改訂

このマップは、「清流の国ぎふ」観光回廊づくり推進事業費補助金を受けています。